I DESIGN いわての木製雑貨で起業！ @Helsinki, Finland

第 9 期トビタテ！留学 JAPAN 日本代表プログラム 岩手県地域人材コース【13/08/2018~25/10/2018, 英国＆フィンランド】

岩手大学人文社会科学部環境科学課程 4 年　高橋佳苗

フィンランドの家具メーカーNIKARI

9 月 25 日火曜日、ヘルシンキから電車とバスを乗り継いで Fiskars という村に向かいました。Fiskars には、NIKARI というフィンランドの家具メーカーの工場があります。NIKARI の CEO、Johanna さんと 1 時間半ほどお話をすることができました。フィンランドでは景色を見渡す限り、ほとんど松と白樺の森が広がっています。家具にもこの 2 つの樹種をよく使うそうです。NIKARI の工場は Fiskars だけでなく他の場所にもあり、デザイナーとのコラボ作品もたくさんあるそうです。都市ではなく小さな村で、どうして若い人が多く働いているのか不思議に思ったのですが、NIKARI ではデザインの大学との連携がしっかり取れていて、デザインを学んだ学生が働きやすい場所を作っています。また工場では男性も女性も半数ずつ働いていて、フィンランドでは男女平等が当たり前になっていることを感じました。

NIKARI 工場兼ショールーム@Fiskars

Fiskars　森と湖の美しい小さな村

NIKARI にも会社と社会の流れがうまく合わない時代があったそうです。しかし、CEO に女性の方が入り、まず会社のコンセプトをしっかりと固めました。自分たちのこれまでの物語を大切にし、これからどういう会社にしていきたいかを考え続けてきて、今の NIKARI があるそうです。「いきなり大きな会社にしようと思ってはいけない。」という言葉が印象的でした。持続可能なサイクルで生産された木材を使用することにこだわり、工場では水力発電を用い、最大限に働きやすい環境を作ろうと努めている姿を見せていただいて、こだわりは会社を形作り、発展させていくためになくてはならないものだと感じました。良いこだわりはファンを作り、その心を掴んで離さないと思います。これからの時代は、良いこだわりを持つ会社が支持されていくのではないかと思います。私も色々なことを学びながら自分のこだわりを突き詰めて、その多くを表現できる会社を作ることができれば良いと考えています。

フィンランドを代表する林業の大企業 Stora Enso

10 月 12 日金曜日、現地ヘルシンキ在住の方に協力していただき、「Stora Enso」という林業の大企業の本社を訪問することができました。大きな企業は、やはり考えていることが違います。会社の理念として、持続可能な未来のために今プラスチックでできているものはぜんぶ木で作る！ということを掲げています。将来的には車のボディやペットボトルを木の原料から作ることも考えているそうです。日本でできるかどうかは想像がつかないのですが、大規模な建設現場のコンクリートを支える枠組みに木材を使うこともあるそうです。高層マンションやアパートにも木を使っていました。使い終わった後のことを考えると、木は一石二鳥どころではないような気がしてきました。木は木材になっても呼吸をするので、部屋の快適さを保ってくれ、コンクリートやプラスチックにはない癒しを与えてくれます。使い終わった後、Stora Enso では木質バイオマスの燃料として無駄なく最後まで木を使うそうです。

Stora Enso 本社 観光地のそばのモダンな建物

作っていただいたネームプレート

ちなみに、木質ペレットは家庭用ストーブと木質バイオマス発電の両方で同じものを使っているそうです。わざわざ種類を分けて作るよりも、効率よく無駄なく作れるので良いシステムだと思います。木に関わる仕事は意外と危ないことや重労働が多いので、機械でできる作業は機械で行い、できる限り働く人の安全を確保するということも心がけているそうです。留学前の事前インターンシップで見せていただいた岩泉の製材業とは規模が大きく異なるのですが、その際に感じた木材を扱う仕事の危険な部分や大変なこと、地方での経営のあり方などを踏まえながらお話を伺うことができて有意義な訪問となりました。Stora Enso はスウェーデンとフィンランドの会社が合併してできた会社で、その歴史は数百年前に遡ります。ヨーロッパでは FSC や BSC といった森林認証の認知度が日本よりも高く、林業の会社にとって大きなアピールポイントになっています。日本でも、より多くの人が森林について考える機会を増やしていきたいと思います。

森が大好きなフィンランドの人たち

岩手と同じぐらいの割合で森に覆われているフィンランドの人は、森が大好きです。森なんて岩手にもあるし、あまり目新しいものはないと考えていたのですが、現地の人に何度か連れて行ってもらうと森に対する考え方が少し変わってきました。松と白樺が入り混じったフィンランドの森は、静かすぎず賑やか過ぎずとても落ち着く場所となっています。9 月・10 月の秋の森は、フィンランドの人にとってわくわくする場所でもあります。なぜなら、黄色や赤、オレンジに色を変えた葉が森を彩り、その葉がひらひらと落ちるなか散歩をすることもできますし、ベリーやきのこを摘んで家に持ち帰り、美味しくいただくこともできるからです。また、森のそばの湖でサウナに入った後に泳ぐ人もいれば、ソーセージを持参して森のなかで焼いて食べる人もいます。とにかくフィンランドの人にとって、湖と森とサウナは切っても切り離せないもののようです。ソーセージを焼くための設備がしっかりと整っていることや、そこで見ず知らずの人と一緒にソーセージが焼けるのをじっと待っている時間がとても新鮮に感じられました。

湖のそばの森のなか 10 月は紅葉が美しい

思いがけずできたきのこ狩り＠Fiskars

岩手にもある光景だと思うのですが、岩手では忙しいことを理由にあまり気にかけず暮らしてしまっていたことがショックでなりませんでした。森の木の葉の色がカラフルに変わることがこんなに美しいということ、ベリーやきのこなどの森の恵みを自分たちで持ち帰りそのままいただける充実感、太陽の光が与えてくれるあたたかさや希望に満ちた気持ち。自然の小さな心地よい移り変わりに感動することもできずにいた自分がなんだか恥ずかしくなりました。連れて行ってくださったフィンランドの方は森に入ると静かになったので、なぜかと聞いてみると、「森に敬意を表しているんだよ。」と言っていました。半分は冗談だと思うのですが、確かに森に入るとあまりたくさん話す必要がなくなるのです。風がそよぎ、木の葉がひらひら舞い、木々の間から太陽が顔を出して、湖面にはその美しい情景がきれいに映し出されている。そんな空間では、たくさんの言葉よりもその空間の美しさを共感できることの方が大切なのではないかと思いました。こんなに身近にたくさんの美しいことがあると気付かせていただいたことに、とても感謝しています。